ファニー・ガール（1968）

FUNNY GIRL

メディア 映画
ジャンル ミュージカル　ドラマ　伝記
製作国 アメリカ
色彩 Color
時間 157分
初公開日 1969/02/22
公開情報 ＣＯＬ

【解説】

２０年代のジークフェルドのショウの大看板だったファニー・ブライスの伝記ミュージカル（作詞Ｂ・メリル、作曲Ｊ・スタイン）の映画化で、舞台同様バーブラが圧倒的な演技と唄で、彼女のワン・マン作品にしてみせた。実際、ドラマ部分に多少のデリケートさはあるが、名匠ワイラーを引っ張り出すまでもない脚本で、夫役のＯ・シャリフを始め、共演者はみなバーブラに精気を吸い取られてお飾りと化している。しかし、彼女の押しつけがましい程の熱唱は、歌だけ切り離すとかなりもたれるが、こうしてパフォーマンス付きで聴くと、有無を言わせぬカリスマ性で確かに人を引き込むのだ。

“ショウ・ビジネスでは成功しない”という、ストラコシュおばさんの占いが見事に外れ、ファニーはジークフェルド氏（Ｗ・ピジョン）の舞台に立つようになる。その手引きをしてくれたのは、有名なギャンブラーのニック（シャリフ）だった。彼女は彼に恋をする。が、つれない放蕩児の彼が再びファニーに会ったのは一年後ボルチモアでのこと。競馬で持ち馬を出走させる彼は彼女に求婚するつもりでいたが大損し、面目ないのでこれから豪華客船に乗り込みポーカーで一稼ぎするつもり、と告げて立ち去る。ファニーは、すでに出港した客船をタグ・ボートで追いかけ自ら彼の胸に飛び込んで行く……。実をいうと物語的に面白いのはここまで。以下はお決まりの「スタア誕生」の後半の展開で、演出も締まらず、悲劇をポジティブなものに転化させるのはひたすらバーブラ頼み。歌唱で圧巻なのはやはり名曲“ピープル”。初めての愛を告白されて戸惑うファニーが恋に強く生きようと宣言する感動的な場面だ。彼女がジークフェルドの反対を押し切って、デビューのショウでの自分の出番をコミカルに変えてしまう“花嫁の唄”は愉快。ステージ場面の演出は続編「ファニー・レディ」を監督するＨ・ロスで、彼好みのバレエなど採り入れているが今一つ気分が出ていない。

【クレジット】

監督	ウィリアム・ワイラー	William Wyler
製作	レイ・スターク	Ray Stark
原作	イソベル・レナート	Isobel Lennart
脚本	イソベル・レナート	Isobel Lennart
撮影	ハリー・ストラドリング	Harry Stradling Sr.
作詞	ボブ・メリル	
作曲	ジュール・スタイン	Jule Styne
音楽	ウォルター・シャーフ	Walter Scharf
出演	バーブラ・ストライサンド	Barbra Streisand
	オマー・シャリフ	Omar Sharif
	ウォルター・ピジョン	Walter Pidgeon
	アン・フランシス	Anne Francis
	ケイ・メドフォード	Kay Medford
	リー・アレン	

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.